
幻想郷征服録

桜三里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想郷征服録

【Nコード】

N2307BA

【作者名】

桜三里

【あらすじ】

博麗大結界に今日も包まれ、平和な日々を過ごす幻想郷。

しかし弱った妖怪、幻想物を回収する役目を持つ博麗大結界が引き寄せ幻想郷へと至らせた相手は、最悪の災厄だった。

黄金の英雄王ギルガメッシュ。

外の世界と結界により隔離されたその地は、世界全てを所有するギルガメッシュにとって、所有物ではない。ならば、よかろう。征服王よ、時にはこの我も^{オレ}征服と戯れようではないか。

F a t e / s t a y n i g h t の英雄王ギルガメッシュが幻想入りという誰得な小説です。少しでも楽しんでいただければ。

プロローグ（前書き）

東方モノを書くのは初めてです。感想などお待ちしております

プロローグ

その男は王であり あらゆる者も あらゆる鎖も

Der Mann ist King, wie f?r jed
e Person wie f?r jede Kette

あらゆる総てを持ってしても繋ぎ止めることが出来ない

Ich kann es nicht damit binden,
auch wenn ich es damit mache,
jedes alles

彼は縛鎖を千切り 枷を壊し 哄笑する世界で唯一の王

Ein K?nig nur in der Welt, von
der er rei?t, und bricht gyve
und Lachen

この世のありとあらゆるモノ総て 彼を抑える力を持たない

Ich habe keine Macht, ihn von
der Welt all jeden Sachen in S
chach zu halten

ゆえ 神は問われた 貴様は何者か

Dann frage ihn Jesus. Was ist
Ihr Name?

愚問なり 無知蒙昧 知らぬならば答えよう

E s i s t e i n e d u m m e F r a g e . I c h a
n t w o r t e .

我が名は——ギルガメッシュ

M e i n N a m e i s t | g i r g a m e s h

プロローグ（後書き）

元ネタはDies i reのラインハルト・ハイドリヒの詠唱、
レギオン』です。『

Side ルーミア

人食いの少女は、眼下に広がる霧の湖を見下ろしながら、いつも通り気促に宵闇の中を舞っていた。

この湖は、昼間になると深い霧で覆われる。そして夜になれば霧が晴れ、また朝になれば霧が発生する、という奇妙な性質を持っている。それが何故なのかは知らないし、興味もない。彼女にとってはただ夜の散策で通り過ぎるだけの場所であり、別段興味の対象にはならなかった。

ルーミアは、この時間が好きだった。

闇を朋友とする彼女にとって、太陽の光は大敵である。一日の活動時間を終えて西へと沈んだ太陽と共に、少女の気安い時間が訪れるのだ。わざわざ自分の周囲に闇が発生させずとも、当然のように闇に覆われた空。星々の瞬きこそ存在するものの、その程度の薄い光はルーミアにとって、闇と変わらない居心地である。

この時間は、彼女にとって何の憂いもなく、狩りができる時間だった。闇を恐れる人間へと夜闇に乗じて襲いかかり、その身を喰らいつくすのが彼女にとって、最高の愉悦となる時間だった。そんな風に襲った人間の数が、もうどれほどになったかは分からない。数えたこともないし、数えようとさえ思わない。例えるならば、今まで何度食事を摂ってきたのかを問われたところで、即答できる人間などいないだろう。ルーミアにとって、人間を食った回数というのは、それに似ていた。

だが同時に、ルーミアは知っている。この時間に、彼女の獲物が出歩きはしないことを。

人間は闇を恐れ、妖怪を恐れる。昼が人間の時間ならば、夜は妖怪の時間だ。それを知っている人間は、夜になれば人間の里で眠りに入っている。妖怪であるルーミアは、人間の里に入ることはできないのだ。領域を侵した時に、動く輩のことを考えれば、至極当然な考えですらある。

例えば――人里の守護者と不死鳥の少女。

例えば――博麗の巫女と黒白の魔法使い。

例えば――妖怪の賢者と九尾の狐。

人里へと侵入した時点で、これだけの大物を敵に回すこととなる。それはルーミアのみならず、妖怪にとっては忌避すべき対象だ。間違はなく、殺されるのは自分であると分かるのだから。

だからこそ、ルーミアにとっての獲物は、危険を承知で里の外を出歩く人里の人間か、もしくは、そんな常識さえ知らない外来人か、その程度に限られる。

とはいえ、人里の人間などほとんど出歩きはしないし、もし存在したとしても、大抵は彼女以外の妖怪にとって食われる。この辺りの妖怪は、どいつもこいつも食欲旺盛だ。そんな中でルーミアが先に発見することなど、それこそ稀、というものだ。

だからこそ、ルーミアは別段、狩りの成果を期待して飛んでいたわ

けではない。どうせ獲物は見つからないのだから、夜の散歩程度の気安さで飛んでいただけだ。

誰か友達でも見つければ、適当に雑談にでも興じよう。この時間ならば、蛍の妖怪か夜雀あたりが暇をしているかもしれない。彼女らの根城は、確か竹林あたりだったかな、と適当に向かう場所を決めようとして。

それを。

見つけた。

霧の湖から紅魔館へ続く森。吸血鬼の住まう紅魔館の威光か、その森に住まう者は皆無と言っている。ルーミアと同じ、人食いの妖怪でさえ住まうことは稀だ。

理由はただ一つ。

吸血鬼の根城近くを人間が通ることなど、皆無であるからだ。

だがルーミアは、見つけてしまった。目を向けてしまった。霧の湖と紅魔館に挟まれた森の、ほぼ中央。

――闇。

闇を操る彼女にとって、ひどく身近な存在。人が忌み、妖が好むもの。

自然、ルーミアの向かう先はそちらへと矛先を変えていた。

まるで、この世全ての悪を内包したかのような、圧倒的な闇。

彼女は、闇を好んだ。

ルーミアの全速でもって、立ち上る闇へと向かう。強大な闇。それこそ、ルーミアの操る闇などお話にもならないほどの、絶対的な闇。それならば――。

喰らえ。

妖怪としての本能が、ルーミアにそう告げていた。

闇の中心へと降り立つ。木々に包まれた森の、小さく拓かれた場所。樹齢が幾らかなど見当もつかない大樹に囲まれた、小さな間隙。

そこにいたのは、男だった。

星の小さな瞬きにさえ煌めく、黄金色の髪。逆立ったそれと同じ色でありながら、それ以上に激しい輝きを持つ、厳かな黄金の鎧を纏っている。少なくともこの幻想郷では、あまり見かけない格好。

鋭い眼差しが、ルーミアを見据えた。

「……消えよ」

重く響く、低い声音。その言葉に込められているのは、圧倒的な威圧感。

殺気すら込められた言葉に、ルーミアは息を呑む。

「我^{オレ}は些か機嫌が悪い。その命を散らせたくなくば、疾く消えよ」

これは――王だ。

決定的に存在の次元が違う、絶対的に存在している、王だ。

そう、本能で、理解した。

ごくり、と唾を飲み込む。畏怖すると同時に。恐怖すると同時に。それは甘美な果実を目の前にしたような感覚でもあった。

ただそこに存在しているだけで、漏れ出る圧倒的な闇。

だからこそ、ルーミアの言葉は、発せられた。

「あなたは、食べてもいい人間？」

いつだって、獲物を目の前にすれば告げた言葉。それに対する答えが何であれ、食うことには変わらないのだけれど。通過儀礼のようなものだ。

己が人食いの妖怪であると誇示し。

相手がこれより食われる運命を暗喩する。

いつだってルーミアにとっての獲物は、この言葉と共に恐怖した。あの博麗の巫女と黒白の魔法使いを除いて、誰もが死に恐怖した。

「……ほう」

だが目の前の男は、そう静かに微笑むだけだった。

「我^{オレ}に対してそのような物言いをするとは、人食いの化生は礼儀も知らぬようだな」

「れーぎ？ それって美味しいの？」

「だが、己が武に依ることではしか語る言葉を持たぬ者は、好まぬこともない」

くくく、と男が嗤う。ルーミアの頬を、一筋の汗が流れるのが分かった。

自分では、この男には絶対に勝てない。

本能がそう警鐘を鳴らす。逃げろ。そう理性が警告する。この場から離れろ。全ての感覚が、ルーミアを追い立てる。

だけれど、知ってしまったのだ。

この、強大すぎる闇を。

「貴様の武がどれほどかは知らぬが、我^{オレ}が少々遊んでやるとしよう」

男が言葉と共に、立ち上がる。ゆらり、と鈍重な動き。しかし、確実に眼差しはルーミアを見据えて。

次瞬。

ルーミアは我知らず、懷からスペルカードを取り出していた。

枚数の提示、カード宣言、スペルカードルールに施されたあらゆる規律を、この場では考えない。あらゆる全ての手段を用いて、あらゆる全ての卑しさを持って、全力で挑まなければ絶対に勝てない。彼女はそう本気で理解した。

これは『弾幕ごっこ』などでは、決してない。

殺し合い、だ。

「夜符『ナイトバード』！」

スペルカードを叫ぶと共に、ルーミアの前方に弾幕が伸びる。翼のように左右へと弾幕を展開し、逃げ場を奪うスペル。煌めく紫と青の弾幕が展開されるも、目の前の男は特にどうということもなく、変わらず面倒臭そうに前髪へと手櫛を入れるだけだった。

「ふむ、さすがは童女といえ化生といったところか」

男はそう呟くと共に、右手の指を弾く。それと共に、確実に男を捉えていたはずの弾幕が。

「……え？」

捻じ曲がった。

まるで物理法則を無視しているかのように、直線に向かっていたはずの弾丸が、男へ当たることを避けるかのように、曲がってしまった。ナイトバードにそんな効果はないし、付加した記憶もない。それなのに。

「さて、どうやら後の世では『絶対不^{アスピス・ヘパイストス}落の砦』などと大仰な名を付けられているらしいが、我^{オレ}にとっては所有物の一つでしかない神代の盾よ。神代より伝わりし盾の前で、貴様の弾丸など塵芥にも等しいぞ、雑種」

男がその右手に携えている、小さな丸盾。まるで時代に合っていない、青銅でできたような盾。神にも等しいほどの――圧倒的な存在感を持った、大盾。

それが男の周囲に不可視の結界を張り、弾幕を全て、捻じ曲げたということ。

ルーミアは混乱した。そんな能力は、聞いたことがない。弾幕とは耐えるものでもなければ防ぐものでもなく、躲すものだ。弾くものでもなければ捻じ曲げるものでもなく、避けるものだ。

そんな常識など、一切が通じない。

「あ……あ……げ、月符『ムーンライトレイ』っ！」

ばら撒く小さな弾丸と、中央に走る光線。いくら不可視の結界といえ、威力だけならばムーンライトレイの方が高い。ルーミアはそう信じて、破壊力だけならばどのスペルにも勝る、それを放ったはずだった。

「ふむ、月光か。悪くはない。もつとも、偉大なる我^{オレ}にとっては月の光すら足りぬ。我^{オレ}を照らしたいと言うならば、太陽を持ってくるがいい」

だがそれでも、男はただ平然と、ただ超然と、そこに立っていた。

信じられない——その思いに、体が震える。

いつか戦った、博麗の巫女。いつか戦った、黒白の魔法使い。どちらも強かったし、ルーミアは勝つことができなかった。

だがルーミアは思う。確かに博麗の巫女も黒白の魔法使いも強い。だけれど。

この男ほどに、圧倒的な力があっただろうか。

「余興は仕舞いか？　では我^{オレ}も、財を幾つか見せてやろう」

同じように、右手で、指を鳴らして。

「^{ゲートオブバビロン}『王の財宝』」

男の背に、数多の神剣、聖剣、神槍、聖槍、古今東西あらゆる神話に登場する、一振りだけで世界の命運を変えてしまえるほどの幻想を持った、武器が。

一斉に、その矛先をルーミアに向けた。

Side 博麗靈夢

博麗神社の夜は早い。もともと、それに対して確たる理由があるというわけではない。

単純に今代の博麗の巫女、博麗靈夢の寝る時間が早い、というだけだ。幻想郷というのは娯楽に乏しく、頼んでもいないのに勝手に持ってくる迷惑天狗の作った新聞くらいしか暇潰しの道具はない。そして靈夢は、八割方が主観で書かれた新聞を、貴重な油を使ってランプを灯してまで読む趣味はない。

つまり、暗くなれば眠る。明るくなれば起きる。それがこの博麗神社の主、博麗靈夢の生き方だった。

そして今日も同じく、いつも通りの時間に床につき、いつも通り眠りについた、はずだったのだが。

不意に、神社の縁側の扉が開く音がした。

物盗りにしては、自分の音を隠していない。つまり、見つかったところで問題のない相手だということだ。もともと、靈夢ならばいくら音を隠したところで、気配で察するのだから意味などないのだが。

布団に包まったままで目を開き、考える。

第一候補、黒白の魔法使い、霧雨魔理沙。

恐らくこの神社に訪れる人間で、最も頻度が高い相手だろう。厄介なトラブルメーカーであるも、どこか憎めない彼女は、何故かよくここに入り浸る。

だがそれも、時間を考えてのことだ。わざわざ霊夢が眠りについてまで、ここに入り浸るほど魔理沙は迷惑な輩ではない。もしも魔理沙だとするなら、何かの事情を抱えていると考えた方がいいだろう。

第二候補、小さな百鬼夜行、伊吹萃香。

魔理沙と同じく、この神社に入り浸る酔いどれ少女の鬼である。いつもふらりとどこかへ出かけて行って、同じくふらりとまた戻ってきては酒を飲む、という生活だ。

考えられるとすれば、ふらりと神社へ戻ってきたはいいものの、夜であるため家主である霊夢のことを考え、縁側にて一人手酌で月見酒でも楽しんでる、といったところか。悪酔いすれば、霊夢が起こされて付き合わされる可能性もある。もつとも、あの鬼が悪酔いしている姿など見たことはないのだが。

第三候補、神隠しの主犯、スキマ妖怪、八雲紫。

幻想郷でも最古参の妖怪で、幻想郷を覆う博麗大結界の維持を行う大妖怪。その実力は幻想郷全ての実力者の中でも五指に入り、特に『境界を操る程度の能力』という反則じみた能力がそれを示してい

る。

まあ霊夢にとっては、ただの胡散臭い妖怪に過ぎないのだが。幻想郷の危機に異変解決へと迅速に乗り出す以外は、式神に任せきりで寝てばかりのグータラ妖怪だ。もしも今訪れた相手が紫ならば、それこそ大問題が発生しているとみていいだろう。

さて、霊夢に思い浮かぶ候補は、それくらいのものだが。

願わくば、少々微睡んでいるため、寝所に入ってこない程度の用件であってほしい。

そんな願いは、叶わなかったけれど。

「……霊夢、起きなさい」

意外な人物の来訪などは当然なく、それは第三候補、八雲紫の声だった。

思い切り溜息を吐きたかったが、堪える。魔理沙の持ってくる厄介事程度ならば、まだ良かった。悪酔いした萃香が無理やり酒に誘ってくる程度ならば、まだ良かった。

この時間に、八雲紫がここを訪れる。それは、すなわち。

幻想郷の、危機を示しているのだから。

「……何よ」

起き上がる。紫はいつも通りの名前と同じラベンダーのドレスを纏い、夜だというのに日傘を片手に枕元に立っていた。体は睡眠を欲していたが、それでも紫を無視するわけにはいかない。

幻想郷の危機とすら呼べる状況に、博麗の巫女である霊夢が動かないわけにはいかないのだから。

「あんたが神社に来るなんて、珍しいわね。賽銭箱は表にあるわよ。でも参拝は、できれば昼間にしてほしいんだけど」

「……火急の用件よ」

霊夢の軽口を受け流し、紫は重々しくそう口を開く。

その表情に浮かぶのは、痛々しいほどの絶望感。幻想郷でも圧倒的な力を持つこのスキマ妖怪の、このような姿を見たことはない。

つまりそれだけ——事態は切迫しているということだ。

「博麗大結界は、外の世界で弱った妖怪を幻想郷に保護する、という目的もある……なんて、あなたは言わなくても知っているわよね？」

「……当たり前でしょ。今更、私に博麗大結界の講釈をしに来たわけ？」

「霊夢……どうやら今回、博麗大結界はとんでもない輩を引きつけてしまったみたいなのよ」

とんでもない輩——その言葉に、思わず霊夢は息を呑む。

この幻想郷に存在する実力者は、それこそ強者に満ちている。例えば目の前のスキマ妖怪であったり、冥界の死を操る亡霊であったり、紅の館に住む吸血鬼の姉妹であったり、蓬莱の姫君とその従者であったり、竹林の炎を操る不死鳥であったり、山の上の神社を司る二柱の神であったり。

地底には核熱を操る鴉も一騎当千の鬼もいる。人里には半人半獣の歴史喰らいもいる。人里近くに最近越してきた寺には、毘沙門天の使いと自称する者までいるのだ。

それだけの実力者が並んでいる幻想郷において、八雲紫が言う『とんでもない輩』。

つまり——それ以上の実力を持つ、博麗大結界の危機となりえる存在、ということ。

「……そいつ、何者よ」

「外の世界で、全てを統べていた王。あらゆる財宝は彼の所有物で、あらゆる人間は彼の支配にあった。人は彼を、こう呼んだ」

八雲紫はそこで言葉を切り、苦々しく唇を噛みながら、ゆっくりと告げた。

「英雄王——ギルガメッシュ」

02 (後書き)

この物語の主人公はギルガメッシュですが、ギルガメッシュ視点にはなりません。基本的には東方キャラの視点になります。

03 (前書き)

説明回です。説明長すぎてダレるかも

S i d e 博麗靈夢

紫からそのように言われた靈夢にできたのは、精々小首を傾げるくらいのものであった。

「……ギルガメッシュ、って言われてもね。何それ、新種の亀？」

「今は冗談を言っている場合じゃないわ、靈夢」

軽口で流そうとしてみたが、変わらず紫の表情は硬い。靈夢にはただ、溜息をつくことしかできなかった。

時間も憚らずに人の寝室を訪ねてきて、しかも語り口が冗長である割に火急の用件だとか、冗談を言っているのはそっちじゃないのか、と対する言葉は幾つかあったけれど、呑みこむ。

「はぁ……大体、そんな危険な外来人が来たってんなら、あんたがどうにかすればいい話じゃない。わざわざ私の所に話を持ってこないでよ」

その代わりに口から出たのは、そんな言葉だった。

八雲紫という一種一代の妖怪は、それだけの力を持っている。

有無を言わず、そのギル亀とやらを自分のスキマに放りこんで、そのままの世界へと捨てればいいだけの話だ。紫にとっては、大した苦勞でもないだろう。

それなのに、わざわざ霊夢の所にまで話を持ってくるという行為が理解できない。

「私も……そう思っていたわ」

だが——それに答えたのは、紫の沈痛な面持ちだった。

「とんでもない奴が来た、そう思って、幻想郷の平和を第一に排除しようとした。私のスキマへと、永遠に封印するつもりだった」

そう言って、紫は右手の扇子を開く。同時に、くぱあ、と空間が裂けるように、彼女の『スキマ』が現れた。

八雲紫の持つ通称、『スキマ妖怪』の語源である——あらゆる距離、時間、法則を無視する空間、スキマ。

「でも、できなかった」

最強とさえ、言っていない能力なのに。

「いえ、違うわね。正確には、ギルガメッシュへとスキマが到達することはなかった。私から何度干渉しても、一定距離へと近付いた時点で能力が掻き消されるのよ」

スキマが到達することなく、打ち消される。

つまり。

「……結界みたいなもんを張ってるわけ？」

「と、いうよりは常時開放型の能力と言った方がいいかしら。博麗大結界が、ギルガメッシュに対して何らかの能力を与えたものと思われるの」

「能力、ねえ」

幻想郷に暮らす者は、大なり小なり能力を持っている。霊夢の『主に空を飛ぶ程度の能力』、紫の『境界を操る程度の能力』をはじめとして、その種類は様々だ。中には紅魔館の吸血鬼のように、『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』、『運命を操る程度の能力』などといった物騒なものまである。

まあ、人里に暮らす一般人なんかは『竈の火がいつでも点けれる程度の能力』、『明日の天気が分かる程度の能力』、『どこに居ても南が分かる程度の能力』などといった、戦いには一切使えない微妙

すぎる能力を持ち合わせている場合が多いのだが。

たまにやってくる外来人は、とんでもない能力を持っていることが多いと聞くが――。

「恐らく……いや、間違いないわね。ギルガメッシュの能力は、『王である程度の能力』よ」

「はあ？　王である程度の能力？」

思わず霊夢は首を傾げる。『あらゆる干渉を打ち消す程度の能力』とかならばまだ分かるが、『王である程度の能力』というのは、あまりにも具体性がない。

しかし、紫の面持ちはふざけているような様子が欠片もない。心底本気で言っているのだろう。霊夢にはどうにも、その『王である程度の能力』の恐ろしさとやらが理解できないのだが。

「ええ……『王である程度の能力』。つまり、その存在そのものが『王』なのよ。王様というのは、基本的には一番偉いでしょう？」

「うん」

それは、霊夢も否定しない。幻想郷に王というものは存在しないため、その偉さとやらがいまいち理解できない部分はあるけれど。

霊夢にとっての王という存在の認識は、「まあ、偉い人なのよね」程度だ。

「一番偉い人物である王は、その行動を誰にも邪魔されない。つまりこれが能力の拡大解釈結果として、『王であるがゆえにあらゆる干渉を拒絶する』ということが起こっているのよ」

「……なるほど。だから紫のスキマが近づけないわけね」

「ええ。私のスキマは、それこそ『干渉』そのものだから」

「でもそれだと……弾幕も効かないことにならない？ あらゆる干渉を拒絶するんなら、攻撃こそまさに最大級の干渉じゃない」

「もしも弾幕が効かなくなれば、それこそ最強だ。絶対に勝てない。霊夢はそう考えて、背筋が寒くなる。」

「……いえ、恐らく、攻撃は効果があるわ」

「なんでよ？ あらゆる干渉を拒絶するんでしょ？」

「確かにその通りだけれど、それはあくまでも能力の拡大解釈なのよ。例えて言うなら——紅魔館のメイド長は知っているわね？」

「咲夜？ あいつがどうかしたの？」

思いもよらない名前に、思わず霊夢は眉を寄せる。

紅魔館のメイド長、十六夜咲夜。『時間を操る程度の能力』という反則的な能力を持ち、一流のナイフ投げの腕を持つ。それでいて吸血鬼姉妹に対するメイドとしての奉仕も完璧だとか。一家に一人欲しいメイド、と評判である。

「あの子は……年をとらないわ」

「は？ 何言ってるのよ、咲夜は人間よ？」

「『時間を操る程度の能力』を持つということは、決して『時間を止める』『時間を動かす』『加速させる』『減速させる』、くらいしかできないわけじゃないわ。『時間』とは人間で言うならば『加齢』、つまり年齢ね。『時間』を操ることができるということは、つまり『加齢』も操ることができる。これが能力の拡大解釈よ」

「……あんたは真面目に説明するつもりがあるの？」

さっぱりわからん、とでも言いたげに、肩をすくめる。

紫は呆れたように嘆息して、「つまりね」とまだ説明を続けるつもりらしい。いい加減説明ばかりで飽きてきた、と霊夢は口を尖らせる。

「ギルガメッシュの持つ『王である程度の能力』の拡大解釈として、『あらゆる干渉を拒絶する』という結果を生み出した。けれど、そ

れはあくまでも拡大解釈であって、能力から産まれた二次的な副産物みたいなもののよ。ギルガメッシュの本来の能力が『王である程度の能力』である以上、博霊大結界によって定められたスペルカードの攻撃は、『干渉』と認識されない。分かった？」

「……ウン、ワカッタ」

もう疲れたため、そう霊夢は紫に生返事を返す。紫はなんとなく訝しむ目で霊夢を見てきたが、特に何も言ってはこなかった。

「まあ、今回は別にいいわ。改めて明後日の昼間、博霊神社を使わせてもらうわよ」

「……なんでよ？」

唐突な話題の変換に、思わず霊夢はそう反応してしまう。

「なんでって、分かってるでしょう？ ギルガメッシュの存在は、幻想郷にあってはならないもの。だけれど、私一人の力じゃ倒せそうにないし、幻想郷の実力者に渡りをつけて、全員でどうにかして倒そう、っていう作戦なんだけど」

「……あいつらが動いてくれるわけ？」

霊夢は、これまでの異変で色々と関わった連中の顔を思い出す。

うん、どいつもこいつも我俣放題かつ自分勝手の自己中だ。とてもじゃないが、紫を中心とした統率的な行動なんて取れるわけがない。

「……そこは、私がどうにかするわ」

が、紫には勝算があるらしい。

霊夢にはとても思い浮かばなかったが、その代わりに嘆息を返す。

「まあ、分かったわ。それじゃ明後日の昼間、使いなさいよ。その代わり、お茶は出すけど出廻らしになるし、茶菓子なんて出さないわ。もし欲しいなら、自分で持ってきてきなさい」

「……何か買ってから来ることにするわ」

ふふっ、と紫が笑う。そしてそのまま、唐突に出てきた空中の裂け目に、吞まれていった。

03 (後書き)

オリジナル宝具解説

アスベリス・ヘパイトス
『絶対不落の砦』

ギリシャ神話に登場する鍛冶の神、ヘパイトスが作り上げた青銅の盾。

『イリアス』においてアキレウスが使用したため、『アキレウスの盾』という名前の方が有名。

真名開放をせずとも、常時一定範囲内に結界が形成される。ただしヘパイトスが作り上げ、アキレウスが使用する『以前』の原典であるがゆえに、本来の『アキレウスの盾』よりもその結界の力は弱い。本物の『アキレウスの盾』は盾自体にアキレウスの不死性が付与されているため、壊れることがない。

宝具解説していなかったので一応。

04（前書き）

若干グロ注意

タグにR-15を追加しました

Side ルーミア

圧倒的すぎる力だった。

空中から唐突に現れた数多の聖剣、魔剣の類に、ただひと振りだけで歴史を変えてきたような武器の数々。その全てがルーミアを刺し、貫き、掠め、突き立てた。

ヒュー、ヒュー、とくぐもった声が、喉から漏れる。その体に四肢は既になく、出来の悪い人形のように転がっている。右腕は粉々に千切れ、左腕は皮一枚で辛うじて繋がっており、左右の足は爆ぜて消えた。それでも、ルーミアはまだ死んでいない。

本来ならば一撃で巨人すらも塵殺できるであろう宝具の射出をその身に浴びながらにして、それでもまだ、生きていた。

「ほう、まだ生きておるか雑種」

金色の男がルーミアに近づき、そう薄笑いを浮かべながら言う。
る。

本来ならば、ルーミアは死んでいる。

四肢を失うまでもなく、最初に放たれた宝具の二、三本目で、ルー

ミアは既に死んでいただろう。

そんなルーミアが生きているのは、ひとえに博麗大結界、スペルカードルールのおかげだった。

枚数の提示といった細かい点については省略したものの、ルーミアは己のスペルカードのみで勝負を行った。そして博麗大結界は、スペルカードルールで戦う以上はそこに死者を出さない。だからこそ、ルーミアは生かされているだけだ。

「^{オレ}我の財をあれだけその身に受け、未だ生きているとはな。化生といえ、その生命力は評価に値する。褒めてつかわす」

どこまでも傲慢に、男はルーミアにそう告げる。

だけれどルーミアは、そんな男の言葉に、胸が張り裂けるような思いを得た。己が、この王に認められた——それだけで、死を待ち動きを悪くしようとしている心臓が弾んだ。

何故、とルーミアは思う。

現在半殺しにされ、そして遠くない未来殺されるであろう相手に、遥かな天空から見下されながらお褒めの言葉をいただく——そんな現状に、ひどく興奮している自分が理解できない。まるで、それが。

——嬉しい、みたいに。

「武辺の化生よ、名を聞こう。我に名乗ることを許す^{オレ}」

「……るー、みあ」

そんな男の言葉に、ルーミアは喉から声を絞り出して応える。決して男は、ルーミアに強要をしたわけではない。声を出すことすら全身が痛むような現状、名前など答える必要なんて一つもなかった。

だけれど、答えなければならぬ、そう思ってしまった。

「ルーミアか。覚えておくぞ、雑種」

どくん、とまた心臓が跳ねる。ルーミアはただ名前を呼ばれたただけだというのに、激しい昂りが心を染めていた。

もっと言葉を聞きたい。もっと近くにいてほしい。もっと名前を呼んでほしい。

そう考える反面、違う感情がそれを制止する。

言葉をいただけるなど勿体無い。あまりの気高さに近寄ることすらできない。名前を呼ばれるなどあまりに畏れ多い。

だって、彼は。

その男は、王であるのだから――。

「さて、一体ここは何処だ。英霊の座に帰るものであると考えていたが、受肉をしている存在は英霊の座に戻らぬということか。全く、まさか最後にあのフェイカーが足搔いてくるとは……」

虚空を睨みつけながら、そう呟く男。

その言葉の内容など何一つ分からない。だけれど、ルーミアは思った。この王は、幻想郷の人間ではない。つまり、外来人だ。

ならば――。

「待……っ、て」

ルーミアに背を向けようとした男を、そうか細い声で制止する。

小さな声ではあったが届いたようで、男は足を止め、そのまま首だけでルーミアを振り返った。

「何用だ、雑種。我^{オレ}を呼び止めるとは、不敬であるぞ」

「……わた、しは、るー、みあ」

「貴様の名は先程聞いたはずだ。いつ我が同じ質問をした」

「あなた、の、家臣に、して、くだ、さい」

そこまで言い切って、ごほごほっ、と咳き込む。口の中を、金臭い血の味が占める。これが人間のものであるならば甘露なのだが、生憎自分の血に対して美味いと思えるほど、ルーミアは変わっていなかった。

男は、そんなルーミアの言葉に眉を寄せる。

「ふむ。そのような半死人の身で我が臣下にあることを望むか。しかし雑種よ、我は弱い家臣などいらぬ。貴様を拾ったところで、最早命は保つまい」

「死、にま、せん……」

相変わらず咳き込みながら、ルーミアはそう男に告げる。この男が手を貸してくれるならば、ルーミアは即座に回復する自信があった。だから、ルーミアは懇願する。

「わた、しが、死、ななかった、ら、家臣、に……」

「ほう。しかし、その状態からどのように生き返るつもりだ？ 我^{オレ}の持つ治療薬をくれてやっても良いが、それでは賭けになるまい。良かろう、家臣のおらぬ王というのも張子の虎よ。貴様が見事生きのびることができたならば、我が一の家臣としてやろう」

「な、ら……」

それを指さそうとして、手がないことに気付いて、思わず苦笑した。意識が朦朧としている。早く伝えなければ、手遅れになるかもしれない。既に四肢を失って、随分な時間が経っている。下手をすれば、このまま死んでしまう羽目にもなりかねない。

だから。

「わた、しの、リボ、ン、を、外……して」

それを、示した。

「リボン？ ふむ、その程度の用事にこの我^{オレ}を使おうとは、雑種とは思えぬほどに面の皮が厚い。しかし、貴様の腕を無くしたのもまだ我^{オレ}だ。此度は我^{オレ}の手を煩わせることを許す」

男が膝を下ろして、ルーミアの頭にある、リボンに触れようとする。それと同時に、ぱちっ、という静電気のような音。

「ふむ」と一言呟き、男が手を引っ込める。

「はず、せ、ない……？」

「巫山戯るな雑種。この我^{オレ}に出来ぬことはない。ふん、まさか封印——しかも、これほど強力な呪いの封をされているとは思わなかっただけだ。この程度、我が財をもつてすれば容易く解除できる」

そう男は言って、何もない空間から、歪な形をした短刀を出した。

全く戦闘には向いていなさそうな、何かの儀式に使われるような、紫色の短刀。男はそれを軽く手先で弄び、そして、ルーミアに向けて。

振り下ろした。

思わず、ルーミアは目を瞑る。その短刀の切っ先は、ルーミアに刺さることなく、ただそのリボンだけを切った。

どくん——どくん——ルーミアの体に、止めどなく力が溢れ出す。

あふれ出た妖気は闇となり、その四肢を形作る。肩までしかなかった髪は腰元まで伸び、そして全体的に幼かった体が、相応に成長し

てゆく。まるで早回しのように行われるその光景を、男はまるで余興の一つであるかのように、腕を組んで見ていた。

「……ふう」

体を再生し、全身を全盛期の姿に戻したのちに、ルーミアは軽く前髪をかき上げた。

服装は普段と変わらないものの、完全にその身に纏う雰囲気は、ルーミアのそれではなかった。むしろ、もっとおぞましい何かであるとさえ言っている。

「ふむ、なかなか良い余興であったぞ」

「……こっちは、体の再生に必死だったんだけどさ。まあ、いいか。お陰様で封印が解けたよ、ありがとう」

「なに、我が臣下のことだ。臣下を気遣うこともできずして、王は名乗れぬ」

男はそう言って、態度を変えない。大抵、封印される前のルーミアを見た人間は、悲鳴を上げてどこかへ逃げていってしまうのだが。

だから、そんな男の態度は、ルーミアにとって好感の持てるものだった。

「では、改めて」

す、とルーミアは頭を下げて、片膝をつく。

それは、騎士が王に忠誠を誓う所作。

「我が名はルーミア。王、あなたに忠誠を誓います」

「ルーミア、貴様の忠誠を受け入れよう。我が名はギルガメッシュ。貴様の王となる者だ」

そうして幻想郷に、一組の主従が誕生した。

04（後書き）

カリスマA十の本領発揮のギル様です。

呪いの類のようなカリスマということで、『特に理由はないけど忠誠を誓う』みたいなことが頻繁に起こるのではないかと考えてルーミアを臣下に入れちゃいました。

EXルーミアについて。

作者の捏造です。だけどルーミアって実はすごく強いと思う。闇を操るわけだし。

それからEXルーミアがよく持っている剣ですが、あれについても勿論あります。勿論宝具です。もう少ししたら出ると思います。

「是非このキャラを臣下に加えてくれ！」ってユーリクエストがありましたらどうぞー。よほど無理なキャラじゃない限りはリクエストにお答えします

Side ミスティア・ローレライ

ミスティア・ローレライは、時折竹林で屋台を営んでいる。八目鰻の蒲焼きと酒を提供し、ミスティア自身は人食いの妖怪であるものの、その屋台を営んでいる限りは人間を食べないと決めていた。その営業努力に本人の料理の腕もあってか、最近では妖怪のみならず人里の人間も飲みにくる程度には認知されている。

夜半。

最後の客が帰り、これ以上営業しても新しい客は来そうにないな――と暖簾を下ろそうとした、その時に。

妙な客が来た。

いや、ミスティアの屋台には、妙な客ばかり来るのだが。例えば食べるだけ食べて飲むだけ飲んだ挙句に颯爽と去ってゆく黒白の魔法使いとか。金払え。あと例えば食べるだけ食べて飲むだけ飲んだ挙句に何事もなかったかのように去ってゆく紅白の巫女とか。金払え。ちなみに二人揃って現在は入店禁止である。

そんなミスティアをして、『妙な客』と言わせるのは、勿論理由がある。

一人は、知り合いだ。知り合いのはずだ。

昨日まではつけていたはずの赤いリボンを何故か外し、幼い容姿が成長して妙齡の女性と言える姿になっている、宵闇の妖怪ルーミア。「そーなのかー」と笑顔で言ってくるのが特徴だったはずの彼女は、何故かそんな雰囲気など何一つ持たない、何かおぞましい妖怪にでも変化したかのように一変している。

そして、もっと妙なのはその連れだ。

黄金の鎧に身を包み、また同じく黄金の髪を逆立てた、男である。ミスティアも幻想郷で暮らして長いが、このような男は見たことがない。容姿もそうであるが、同じくその身を包んでいる、淀んだような闇そのものも。

「いらっしやいませー」

まあ、妙であろうと変であろうと注文して金さえ払ってくれるならば、ミスティアにとってはいいお客様である。ひとまず七輪に炭を追加して、うちわで扇ぐことにした。

「夜中にすまないね、ミスティア。もう閉める頃だろう？」

「ううん、いいよ。それよりご注文は？」

「ん。私は八目鰻の蒲焼きを二つに、冷酒を一つ。王、どうされま

すか？」

注文に、ミスティアは七輪の上へと串に刺した鰻を載せる。だが同時に、ルーミアの口調に違和感を覚えた。まるで子供を相手に行っているかのように、どうにも幼いのがルーミアらしさだったのだが。

まるで身体的のみならず精神的にも成長しているかのように、本当に別人ではないかと思えるほどに、ルーミアらしくない。

そして何より、そのルーミアが、連れを『王』と呼んでいるのだ。

王という苗字なのか、と一瞬思うが、まさかそんなことはあるまい。疑問が頭を巡るが、特に気にしないことにしてミスティアは冷酒を注ぎ、ルーミアの前に出す。

「ふむ。では店主よ、この店で一番高いものはなんだ？」

「……はあ。うちは八目鰻の蒲焼き一本でやってますんで、八目鰻の蒲焼き以外は出ませんけど。酒ならこの前、人里の老舗の酒蔵から仕入れた一級品がありますが」

「ではそれを疾く出せ」

「はい。少々お待ちください」

偉そうな客である。ミスティアは別に、『お客様は神様です』という妙な宗教は持ち合わせていない。むしろ『お客様は金様です』と

いった方が正しいと考えている。まあ、とはいえこちらが店で向こうが客である以上、そんな対応も仕方ないのかもしれないが。

先日仕入れた一級の酒、『伊森蔵』をグラスに注ぎ、七輪に新しい鰻を乗せて酒を出す。

「蒲焼きはちよいとお待ちくださいな」

「ああ、ゆっくり待つよ。さて……王、まずは乾杯といきましょうか」

「うむ、良かろう。新たな臣下と盃を交わすというのも、悪くはない」

チン、とグラス同士を合わせて、それぞれ一口飲む。『伊森蔵』はそれなりに強い酒なのだが、男は特に気にしていないように、一気に煽った。

「ふむ。王の飲み物としては些か安物だが、このような屋台だ。仕方があるまい」

「それは……王、申し訳ありません」

「なに、安酒とて時には悪くない。店主、もう一杯用意せよ」

空になったグラスをミスティアに出してくる。ミスティアは小さい

ため息と共に、「はいな」と受け取ってもう一杯注いだ。一応、ミスティアの店では一番高級な酒なのだが、これ。

蒲焼きが焼き上がり、二人に出す。あとはまあ、酒の席で盛り上がる二人を、隣で聴きながら話を振られれば入る程度だ。

どうせ今日は、この二人で店じまいだろう。ミスティアはそう考えて、グラスに『伊森蔵』を注いだ。せっかくだし、ちよっと一杯飲んでみよう。

「さて……王。これからどうなさいますか？」

「ふむ。どう、とはどういう意味だ？ ルーミア」

「いえ、この地の支配に乗り出さないのか、ということです」

「ふん、諫言には耳を傾けるのが王たる者の務めであるが、そのような戯言はどうでもよい。元より我は王、この我の総べておらぬ地などなく、我はどこにいたところで王であることに変わりはない」

なんか目の前ですごい会話が行われていた。

ルーミア、何に毒されちゃったんだろう、と友人が心配になってくるミスティア。というか、本当に目の前にいるのがルーミアなのかどうか疑問にすら思えてくる。

「とはいえ王、ここは幻想郷。この地に王はおりません」

「何を言うか。我^{オレ}は世界を統べし王。それは極東のこのような大地でも変わらぬ」

「ここが結界によって外の世界と隔絶された場所だとしても、ですか？」

冷酒を口に含みつつ、ルーミアは男に対してそう言う。ふむ、と男は考えるように顎に手をやった。

「どういうことだ？ ルーミア」

「王は世界を統べし偉大なる王です。ですが、この地は外の世界より隔絶され、千年以上も経ています。今や里人も、偉大なる王が存在することなど覚えておりますまい。この地は結界により隔絶された瞬間に、王からの統制を拒絶したようなものです」

「……成程な。つまりこの幻想郷という地には、我が威光は届かぬということか」

「は。ですので是非、王にはこの地を支配していただきたい所存です」

ミスティアには全く理解できない会話を続ける二人。いや何考えてんの幻想郷の支配とか。というかルーミア、そんな野望持ってたっけ？

男は小さく嘆息して、そしてグラスに入っている酒を一気に煽った。

「良かろう。その諫言、受け入れようぞ」

「ありがたき幸せにございます、王」

「この世の全ては我が物と考えておったが、我が威光の届かぬ地が存在するというならば、それも一興というものよ」

くくく、と男は笑う。まるで、この世全ての悪を内包しているかのような、底知れない闇を抱えて。

「ならば、良かろう。征服王よ、時にはこの我^{オレ}も征服と戯れようではないか」

05（後書き）

カリスマA+の扱いについて。

呪いのようなカリスマということですが、誰しもがかかるわけではなく、力の弱い存在や十把一絡げのような妖怪については有効ですが、それなりに強力な妖怪や人間に対してはそこまで効果がありません。

傷ついて力の弱ったルーミアはギルガメッシュに心酔しておりましたが、EXになった現在は心酔というより忠誠という感じです。一度忠誠を誓ったから、誓い続ける、みたいなイメージで。

ちなみにみすちーは力が弱っているわけでもないのです、ギルガメッシュに心酔しません。死にかけたらするかも。

Side ミスティア・ローレライ

酔っ払いの戯言としか思えないような会話が、今まさに目の前で繰り広げられている。今日最後の客だというのに、ミスティアは頭を抱えたくなった。頼むからそんな物騒な話は、自分の屋台以外でしてほしい。もしも偶然にどこかのスキマ妖怪でも通りがかったらどうするつもりなのだろう。

しかし、そんなミスティアの思いは知られることなく、何故かルーミアが端を開いた幻想郷征服計画が、着々と進行していく。

「それでルーミアよ。この地を我が支配^{オレ}することは客かではないが、現在は誰がこの地を治めておるのだ？」

「……特に、誰が治めている、ということはありません。幻想郷は様々な強者が、好き勝手に根城を作って好き勝手に振舞っているのが現状です」

「ふむ。つまり戦国の世ということか」

いえ、全然違います。ミスティアはそう突っ込みたかったが、巻き込まれるのが嫌なので極力話しかけないようにした。

スキマ妖怪さん、もしここを通りがかったとしても、私は無実です。何一つ関与していません。だからどうか助けてください。ミスティ

アは酒を飲む手も止めて、そう祈ることしかできなかった。

「では質問を変えよう。どのような強者がいるのだ？」

「それが、王。申し訳ありません。何分、私はつい先程まで何も考えずに動いておりましたので、幻想郷の力関係についてはあまり詳しくないのです。ですので」

なんだか、嫌な予感がする。

こういうのは、何故か当たるのだ。リグルでもないのに虫の知らせというのもおかしな話だけれど、そういうのに似ている。

ルーミアが、ちらりとミスティアを見やり。

「ミスティア。君なら詳しいだろう？ 王に少し、幻想郷における勢力図について説明してくれないか？」

ああ——やっぱり。思わず頭を抱えそうになるが、抑える。

どうか神様——（山の上の）仏様——（人里近くの寺の）スキマ妖怪様——（実はこれが一番怖い）、私は無実です。ただ情報をよこせと言われるから喋るだけです。

「……別に、あたしはそこまで詳しいわけじゃないんだけどさ」

「何言ってるんだミスティア。前に言ってたじゃないか。色々と幻想郷の実力者たちが店を最前（マクサ）にしてくれるから、妙に情報通になっちゃった、って」

どうしてそんなこと覚えているのきルーミア、とジト目で睨（にら）んでみる。

「ほう、ならば丁度良い。では店主、我（オレ）にそれを教えることを許す」

そして何故、この男はこんなにも偉そうなのだろう。はあ、と小さく嘆息して、ミスティアは諦めた。

どうせミスティアが喋らずとも、誰かが教えるだろう。どうせ遅かれ早かれなのだから、ミスティアが罪には問われまい。

「……あたしもそんなに詳しいってわけじゃないんですけどね……
やっぱり一番は、博麗神社ですかね」

「ほう、博麗神社とは？」

「妖怪退治を生業にする、幻想郷で異変が起こればすぐにでもそれを鎮めに行く、という幻想郷でも最強と名高い人間、『博麗の巫女』がいるんですよ」

ミスティアの脳裏に浮かぶのは、札を構えた腋巫女、博麗霊夢。

あらゆる異変を解決し、暴れる妖怪を打ち倒す博麗の巫女。ミスティア自身も、一度異変で相對したことがある。とんでもない勘の良さと天性の戦闘センスにより、低級の妖怪など物の数にもせず、異変では吸血鬼や神を相手にしてすらも勝利したとか。

「ふむ。魍魎魍魎が跋扈したこの地で、最強と名高い人間か」

「ええ……まあ、あたしもそこまで知っているわけじゃないですけどね。それから次に、やっぱりお山の上の神社ですね。守矢神社ってんですけど、そこには二柱の神様がいるんですよ。一人は戦いの神様で、もう一人は崇りの神様だとか。外の世界では、相当に神格の高い神様だったみたいです」

闘神、八坂神奈子と崇神、洩矢諏訪子。

ミスティアは噂でしか聞いたことがないが、二人の能力は『乾を創造する程度』と『坤を創造する程度』だと聞いた。乾坤とは八卦において天地を意味し、そういう意味では彼女らの能力は、二人合わせて天地を創造する、という非常に神様らしい能力である。

しかし、その言葉を聞いた男は、ふん、と鼻息荒く眉根を寄せた。

「所詮はたかが神だ。恐れるに足らん」

「はあ……。んであとは、やっぱりスキマ妖怪の八雲紫さんですか

ね。聞いた話じゃ幻想郷の統括者で、博麗大結界で幻想郷を覆ったのも八雲さんだとか。式には九尾の狐もいるらしいですし、本人も相当強いって聞きます。それに白玉楼っていう、冥界にある屋敷に住んでいる亡霊の姫様とも仲が良いとか聞きますし、その気になれば幻想郷を支配できる立場にあるんじゃないですかねえ」

常に日傘を差している姿が思い浮かぶ、紫のドレスに身を包んだ八雲紫。

微笑みを浮かべている姿を遠目で見たことしかないが、あまりの恐ろしさにミスティアは戦おうとさえ思わなかった。単純な強さのみならず、その不気味さ、そして、その底知れなさは妖怪からしても恐ろしい。

男はそんなミスティアの言葉を、ふむ、と顎に手をやって聞くだけだ。

「あとはここ……迷いの竹林の奥に、永遠亭って薬屋さんがありますね。あそこにいる人たちとはあたしも面識ありますが、月から来たとか聞きました。特にあそこの姫さんと従者の薬屋さんは不老不死らしいですし、強さもかなりのものだとか」

蓬莱の姫、蓬莱山輝夜と、月の頭脳、八意永淋。

一応迷いの竹林を根城としているミスティアは、何度か輝夜と、もう一人の蓬莱人が殺しあっている姿を見たことがある。腕が千切れても即座に繋がり、頭が吹き飛んでもすぐに生える、そんなありえない光景をなんども見てきた。

「まー、あとは人里近くのお寺さんは、相当強い聖人さんを筆頭とした武闘派集団だとか聞きましたね。それに人里にも半人半獣の守護者さんがおりますし、ああ、あとは三途の川の向こうに閻魔様と死神、それから空には天人、地底には地霊殿ってところがありますね。このへんについては、あたしはあんまり知らないもんで」

列挙していくミスティアに、ただ黙して考えている男。

ミスティアはそこで、おっと、と思い出した。どこよりも目立つというのに、言うのを忘れていた。

「あとは精々、霧の湖を超えた先にある紅魔館ですかね。あそこの当主さんが、『悪魔の王』って名高いレミリア・スカーレッツ……」

そこでミスティアは、激しい殺気に言葉を失った。

思わず、息を飲む。とてもではないが、まともに呼吸することすらできないほどの強烈な殺気。それは目の前——黙して何も言っていなかった、その男から発せられた。

「……まさか、この地にも王を名乗る不屈き者がいるとはな」

くくくつ、と男は笑う。底知れぬ沼のような、まるで人間の心のよ

うな、暗く深い闇を孕んで。

ルーミアが、隣で微笑んでいた。まるでその闇こそを、己の伴侶だとしても言うかのように。

ミスティアには、何も言えなかった。ただ、目の前の男に――王に、畏怖していた。

「我が我^{オレ}以外に王と認める相手は、この世にただの一人だけよ。そして、奴がこの世におらぬ以上は我^{オレ}以外の誰も王を名乗ることは許さぬ。おい店主、名を名乗れ」

「ひっ!? み、ミスティア・ローレライですっ!」

そんな男――王の言葉に、思わずミスティアは名乗る。王は、まるで新しい玩具を手に入れた子供のように、ひどく楽しげに笑いながら。

「そうか、ミスティアよ。我が名はギルガメッシュ。疾く、我^{オレ}をその不届き者の住まう地へ案内せよ」

こくこく、とまるで糸の切れた操り人形みたいに、ミスティアは頷いた。

そんなミスティアの態度に、王――ギルガメッシュは、鷹揚に頷いて。

「^{オレ}我以外に王を名乗る不届き者は、我が手で誅殺してくれようぞ」

06 (後書き)

と、いうわけで今後の方針は紅魔館攻めになります
臣下にしたいたいキャラなどありましたらリクエストどうぞ！。

Side 博麗靈夢

博麗神社は珍しいことに、賑わっていた。普段は参拝客など誰一人来ることなく、ただ無闇に落ちてくる葉っぱを竹箒で掃き続け、飽きれば縁側でお茶を飲むという霊夢の日常にとって、非常に珍しい日である。

もつとも、それが参拝客であり賽銭の一つでも寂しい賽銭箱に入れてくれるのならありがたいのだが、残念なことに今日集まっている面々の目に、賽銭箱なんて映っていない。

博麗神社の、いるかないか分からないような神様に祈りを捧げるような奴は、この場にはいないからだ。

「今日は、突然の招集に応じてもらってありがとう」

博麗神社の広間。霊夢一人で暮らしている神社にある部屋の中で、最も広い一室だ。たまに起こった異変の後など、ここで宴会をすることが多い。

しかし、残念ながら本日は宴会などではなく、それぞれ参加者の前に出されているのは茶と茶菓子（紫が持ってきた）である。そして宴会のように誰もが笑っているわけではなく、全員その表情は硬い。

上座に座っているのは、八雲紫。そして同じくテーブルを囲むのは、幻想郷屈指の実力者とも言える七名だった。

「……おほん、幻想郷に先日やってきた男、ギルガメッシュへの対策を練るために、あなたたちに集まってもらったのよ。まず、説明をさせていただきますわ」

す、と右手を上げた紫の近くで、両端をリボンで結んだ裂け目――スキマが現れる。

そこに映るのは、黄金の髪を逆立て、また同じく黄金の鎧をその身にまとった、男。その男に跪くのは、同じく鮮やかな金髪の女性か。女性の服がえらくボロボロであることが気にかかるが、それ以外には特筆することもないような絵である。

「まず……この男、ギルガメッシュは、放っておけば幻想郷の危機とすらなる者。私、八雲紫は、幻想郷を統括する者として速やかな排除を行いたいと考えているわ。しかし残念なことに、この男の持つ能力――『王である程度の能力』により、私のスキマでは干渉ができないの。そこで、あなたたちには私に協力してもらって、対ギルガメッシュへの――」

「……解せないね、八雲」

紫の言葉を遮ったのは、赤い服の胸元に鏡を備え、頭に注連縄を巻いた紫の髪の女性、八坂神奈子。妖怪の山の上、『守矢神社』に住まう神の一柱である。

顎に手をやって紫を見るその姿は、決して好意的なものではない。それはこの場にいる、誰もが理解できること。

「一体どうかしたかしら？ 八坂の神様」

「そのギルガメッシュっていうのは、外来人だろう？ そんな相手にどうして、私らが連合を組む必要があるのさ。幻想郷の危機って言われても、あたしらは新参でね。よく分からないんだけど」

「……ギルガメッシュは、幻想郷を破壊する力を持っているわ。『王である程度の能力』であるがゆえに、『あらゆる干渉を拒絶する』という副産物を得た彼に、博麗大結界の隔離は通用しない。つまりギルガメッシュは、幻想郷を自由に出入りすることができるし、下手をすると博麗大結界が壊されることになるかもしれないのよ」

「でもだからといって、殺す必要はないのではないか？」

紫の言葉に反論をしたのは、別の声。

紺のワンピースのような服に、同じ色の帽子をかぶった白髪の女性、『人里の守護者』として有名な半人半獣、上白沢慧音。人里で寺子屋も営んでいる彼女に、そんな簡単な人殺しというのは、やはり耳に障ったのだろう。

「そのギルガメッシュという男は、今のところ何もしていないのだから？ ただ幻想郷に来ただけだというのに、来ただけで殺すというのもどうかと思うぞ八雲紫。そうでなければ、いつも言っている『

幻想郷は全てを受け入れる』という言葉撤回すべきだ」

「あら。『何もしていない』ことが即ち免罪符になるわけではないでしょう？」

そんな慧音に反論をしたのは、また別の声。

こちらは薄い水色の和装に身を包み、同じ色の帽子に死装束の『天冠』と呼ばれる三角の頭巾をあしらった、冥界・白玉楼の主にして亡霊、西行寺幽々子。

「未来がある存在である以上、そこには幾つもの分岐があり幾つもの未来があるわ。その分岐の一つが、幻想郷の完全壊滅という最悪の未来でないとは限らないでしょう？ 未然に防げる災害があるというならば、それを防がない手はないわ」

「……私は反対ですね。例えばどのような悪逆無道な者であれ、必ずや改心する機会はあるはずです。それを連れ立って殺しにかかるなど、人の道に反するでしょう」

幽々子の言葉に反論を返すのも、また別の声。

仏道を謳う者でありながら、どこか西洋の宗教服のようなものを身に纏い、紫の髪が肩のあたりから金色に変わっている、という変わった髪色の女性、人里近くの『命蓮寺』の主、聖白蓮。

「最悪の未来があると言うならば、そこには最良の未来も存在することでしょう。貴方の仰ることはまるで、将来的に人殺しになる可能性があるから赤子を殺せ、と言っているに過ぎません。そしてそのような非道なことは、誰もしないでしょう？」

「確かにその通りね。永遠亭は聖さんを支持します」

白蓮の言葉に賛同するのは、また別の声。

中華風の服の半分を青、半分を赤、というどこか奇妙な配色に染めた、銀髪を後ろで三つ編みにした女性、『永遠亭』の薬師にして月の頭脳と称される、八意永琳。

「私はあくまで薬師だけれど、医という道で考えるならば聖さんの意見が真っ当に正しいわ。それに我々はあくまで薬屋。荒事は専門外よ。もしも連れ立って殺しに行く、なんて結果になったとしても、永遠亭は不参加を表明します」

「その通りですね。我々命蓮寺も不参加を表明します。そのような不義の戦いをするつもりはありません」

「不義だか何だかは知らんが、守矢神社も参加しないよ。そんな外来人一人に対して集団でかかるほど、神は外道あたしらじゃない」

「はあ。なんだか流れ的に乗っておきましょかね。妖怪の山も不参加を表明しましょう。天狗はもともと、山以外に興味のない連中が多いものですから。ああ、一応今回の招集におきましては、天魔様から全権を委任されております射命丸です」

永琳、白蓮、神奈子と不参加を表明し、さらに続いて妖怪の山の烏天狗、射命丸文も不参加を表明した。

「……く。よ、よく考えなさい！ ギルガメッシュは、博麗大結界すら打ち壊す可能性を持っているのよ！ もしもその力が大結界に向けられたら、幻想郷は終わってしまう！」

「紫、無理よ。もともと、幻想郷は誰もが好き勝手にやるのが当たり前でしょ」

はあ、と溜息をついて、霊夢は紫をそうたしなめる。元々上手いくとは思っていなかったが、当然のように予想通り、協力的な勢力なんて白玉楼くらいだった。まあ、幽々子が紫の友人だからだろうけれど。

「くっ——こ、紅魔館はどうなのかしら。十六夜咲夜、だったかしら？」

「今回の招集、主の名代として参りました十六夜咲夜でございます」

す、と行儀良く一礼をするのは、メイド。上下共にフリルをあしらったミニスカートのドレスに、さらにフリルをあしらったエプロンをつけている。どこからどう見てもまごうことなきメイド、紅魔館の『完璧で瀟洒なメイド』十六夜咲夜。

「今回、私は主——お嬢様より、お言葉をお預かりしております」

頭を上げて、特に何の感情も見せず、紫を見る咲夜。その表情にも、やはり感情はない。

その形の良い唇が動き、鈴の鳴るような声で、至極なんでもないことのように、咲夜は告げた。

「『紅魔館は一切感知しない。幻想郷が壊されることになったならば、それは貴様らの弱さが原因だろう。この紅魔館はそのような外来人を相手に連合を組むほどに落ちぶれてはいない。例えその者に攻められたとて、返り討ちにしてくれる』との仰せです」

そうして、幻想郷の実力者を集めた会議、ギルガメッシュ対策会議は。

誰の賛同も得られぬままに、解散の運びを迎えることとなった。

07 (後書き)

まあ、幻想郷の好き勝手やってる人たちが簡単に結束するわけないですよー、という話です。

Side 魂魄妖夢

幻想郷の実力者がそれぞれ博麗神社に集まった会議に、妖夢は参加していなかった。

それも当然である。会議を行っている広間にいるのは、それぞれ幻想郷の実力者かその名代としてやってきた者たちで、妖夢は西行寺幽々子に仕える従者に過ぎない。主である幽々子が会議に参加している以上、妖夢のような従者がそこに入るべきではないのだ。

それゆえに、縁側でやや退屈しながら待つ。会議を行っている広間とは襖一つ隔てただけであるため、内容を聞こうと思えば聞けるのだが、わざわざ盗み聞きのような悪趣味な真似をするつもりはないし、どちらにせよ幽々子が教えてくれるはずだ。もしも教えてくれないならば、それは妖夢に知る必要がないだけのこと。どちらにせよ、従者である妖夢が口をはさむべき問題ではない。

白玉楼に戻ったら、庭の整備をして、それから幽々子の食事を用意して――ああ、煮物ができるまでに少し時間があるから、寝所の掃除をしておこう、などと考えていると。

唐突に、広間の襖が開いた。

どこかど、どことなく不機嫌そうな面々が出てくる。守矢神社の八坂神奈子、人里の上白沢慧音、永遠亭の八意永琳、烏天狗の射命

丸文、紅魔館の十六夜咲夜。

それぞれ、幻想郷の実力者とその名代だ。

妖夢は彼女らの歩みを邪魔しないよう、端に寄る。かといって、頭を下げるわけでもなければ声をかけるわけでもない。妖夢がその頭を下げる相手は、主である西行寺幽々子だけだ。いくら幻想郷の実力者だといえ、妖夢が頭を下げる必要はあるまい。

不機嫌な面々がそれぞれ、博麗神社から出てゆく。

どうやら、会議は失敗に終わったらしい。妖夢が聞いていたのは、『幻想郷にやたら危ない奴が来たから、全ての勢力を集めて連合を組み、撃退をするための会議』である。そもそも幻想郷で好き勝手にやっている彼女らが、何の利もなく動くことはないだろう、と従者という立場を弁えず予想はしていたのだが。

「待たせたわね、妖夢」

襖の向こうから、ようやく主である幽々子が顔を出した。

妖夢は居住いを正し、頭を下げる。

「お疲れ様でした、幽々子様。会議はいかがでしたか？」

一応、そう聞いておく。出てきた面々から、予想はできていたけれ

ど。かといって予想だけで判断し、主からの下知を聞かないのは従者としてありえないことである。

幽々子は、小さく微笑んで。

「ええ、上手くいったわ」

と、まるで予想と正反対のことを言ってきた。

出てきた面々の表情から察するに、明らかに失敗に終わったと考えていたのだが、それは妖夢の勘違いであつたらしい。一体どうやってあのような面々を、何の利もなく動かすことができたのか気にかかるが、それは従者としての本分を超えている、と判断した。主である幽々子が会議に出て、そして会議は何事もなく成功を収めた。従者たる妖夢が考えることなど、それだけでいい。

「それは重畳でございます。では幽々子様、白玉楼へ戻られますか？」

「ええ。早く帰って妖夢のご飯が食べたいわ」

「承知いたしました。腕によりをかけて作らせていただきます」

「うん。じゃあ、その前に」

と、幽々子は襖の向こうを振り返って。

「紫、今回みたいなことは、もうたくさんよ。明らかに向こうの言
ったことの方が正論なのだから、無理に押し通すような会議はや
めてちょうだい」

「それは悪かったと思っているわ、幽々子」

襖の向こうからそう声をかけるのは、八雲紫。幽々子の友人であり、
たまに白玉楼へやって来ることがあるため、妖夢にも面識がある。

もっとも、向こうは大妖怪であり幽々子の友人であり、自分はその
従者である、ということを考えて会話をしたりすることはないけれ
ど。

うふふ、と小さく幽々子は微笑んで。

「まったく、誰から見ても交渉失敗にしか思えないのにねえ。まさ
かあの面々も、考えてはいないでしょうね。既に紫の掌の上だなん
て」

「あら、人聞きが悪いことを言わないで頂戴、幽々子。私はあくま
でも、可能性を提示して危険を警告した。それに従わなかったのは
向こうなんだから」

「もしも、何の利もなく従うような物好きがいたらどうするつもり
だったの？」

「それはむしろ願ったりだったわよ。『駒』は多ければ多いほどい

いわ。例え前に一步進むことしかできない歩兵であっても、壁としては使えるわ。それに、進んでいけばいずれは金になる。そうなればもっと、使い勝手が良くなるでしょうね」

「何事も将棋のようにいくとは限らないわよ？ 紫」

「あの盤面は世界の縮図よ。少なくとも、私はそう信じているわ」

うふふふふふ、と紫の幽々子、それぞれの笑い声が重なる。

それで会話は終わり、とばかりに幽々子は顔を背け、歩きだした。

「それじゃ妖夢、帰りましょうか」

「はい。今晚のお食事は何がよろしいですか？」

「そうね。じゃあ、久しぶりに肉じゃがを作ってもらえると嬉しいわ」

「承知しました」

紫と幽々子、二人して何かを企んでいる。それは妖夢にも分かる。

だけれど、それだけだ。分かったところで、妖夢には何もするつもりはない。何を企んでいるとも、何を考えているとも、妖夢はただ従うだけだ。例えそれが悪であれ、破滅への道であれ、主と共に殉じる覚悟を持ってこそ、真の従者であるのだから。

さあ、今は過ぎ去った会議のことなど、考える必要はない。

今晚の味噌汁には何を入れようか——そう考えて、妖夢は幽々子と連れ立って博麗神社を後にした。

08 (後書き)

はい当然、老獪……ゲフンゲフン、聡明な紫様は考えなしなんかじやありませんよー。

さて、フランを臣下について賛否両論あるようですが、皆様はどうお考えでしょうか？ よろしければアンケートをお願いします

A. 臣下にしない。フランとギル様のガチバトル

B. 臣下にする。フランの力をギル様側で振るうルート

C. むしろもう幽閉され続けていいんじゃない？

感想の後ろにA B C書いてくださいな！。

Side レティ・ホワイトロック

どうしてこうなった。レティの脳裏に浮かぶのは、そんな言葉。

いつも通りに霧の湖で、成り行きで保護者みたいになってしまった水精、チルノが遊んでいるのを眺めていると、突然やってきたのは顔見知りの少女。

いや——顔見知りだと思う少女、と言うべきか。

宵闇の妖怪、ルーミア。

以前からチルノとミスティア、それにリグルを加えてよくチルノと遊んでいた妖怪である。彼女らの住処はここより大分離れているはずだが、何故か馬が合うのか一緒に遊んでいる姿を何度か見たことがある。

しかしそれは、あくまでも少女であったルーミアだ。目の前にいるルーミアは、格好こそ以前と変わらないが、髪が伸び、背丈もレティと並ぶほどに大きくなり、出るところは出て引つ込むところは引つ込んでいるという見事な大人の女性だった。

特にチルノは気にしないようで、そんなルーミアを相変わらず遊びに誘っていたが、ルーミアは逆にチルノに、一緒に来るように誘っていた。その口調も、以前とは全く違う。どこか違和感を覚えながらも、まあ妖怪、そんなこともあるだろう、と特に気にしないこととした。チルノが本質的にルーミアだと判断しているのなら、そこ

にレティは口を挟むべきでないだろう。

そしてルーミアに誘われるままについて行くチルノに、なんだか放っておけなくて一緒に来た。その結果だ。

どうしてこうなった。レティは心中で、もう一度反芻する。

「貴様らか。新たに我の臣下になりたいという雑種は」

チルノとレティ、そして同じくルーミアに連れてこられたのであるう、蜚の妖怪リグルも並んで立っている前で、腕組みをしているのは黄金の鎧に身を包んだ男。

その男の傍に待るように、忠誠を誓っています、と顔に書いてあるようなルーミアが従い、その逆隣には全てを諦めたかのようなミスティアが並んでいる。見事に、金色の男以外はチルノがよく遊ぶ妖怪たちだった。

「おー？ おまえすげー金色」

「ふん、雑種にもこの我の偉大さが分かるか。黄金とは王たるこの我にあしらえた色だ。だが雑種、口の利き方に気をつけよ。我が名はギルガメッシュ、貴様の王となる者だ」

「ギル？ おー、名前もかっこいいな！」

「偉大なる我の名は我に見合ったものであるべきであろう。それが

分かるとは、雑種にしては見る目がある。くくく、気に入った。貴様を我が臣下として認めよう。この我の威光にオレ従うがいい」

何故かそんなチルノは、目の前にいるその男——ギルガメッシュに對し、何の気負いもなくそう話しかけている。そしてギルガメッシュの方も、チルノを気に入ったようだ。

だけれど——と、レティの体に思わず震えが走る。

——闇。

その身に抱えているのは、大いなる闇。まるでこの世全ての悪を飲み込んだかのような、底知れない沼のような深い闇。レティにはとても許容できるものではないほどに、その闇は巨大すぎた。

これは、近付いてはいけないモノだ。レティの本能がそう警告する。今すぐ踵を返し、チルノを抱えて逃げなければならない。そうとさえ思わせる。

「名を名乗るがいい」

「あたいはチルノ！ サイキョーの妖精よ！」

「そうか、チルノよ。我が臣下である以上、その名に恥を塗るな。」

最強たる者たりえるとするならば、その力に慢心することなく精進せよ」

す、とギルガメッシュの目が、レティとリグルを捉える。

その眼差しは、やはり底知れない闇を孕んでいて、それでいて、途轍もない魅力があった。

瞬間、理解する。その眼差しに、レティは抗うことなどできない、と。例えどのような甘美な果実があったとして、この眼差しに、この存在に、適う物などあるまい、と。

「貴様らも名を名乗ることを許す」

「り、リグル・ナイトバグですっ！」

レティの隣から発せられたのは、まるで恐慌そのもののような声。歯の根は噛み合わずにガチガチと震えており、ギルガメッシュを見る目は恐怖そのもの。

そして、その恐怖ゆえに、抗えない——そんな感情が、まさしく顔に書いてある。

「……レティ・ホワイトロックよ」

どうしようもないほどの激情に心を支配される——そんな感覚すら

も過ぎる。レティの心を占めるのは、リグルのように恐怖ではない。心臓は早鐘を打っているが、決してそれは恐れから来るものではなかった。

例えるならば、畏怖。

研ぎ澄まされた日本刀のように、芸術的な美しさを醸し出しながらにして、誰かが握れば簡単に人斬り包丁と化すような。図り知れない魅力を持ちえながらにして、機嫌を損ねれば一瞬でこの首が飛ぶような危うさ。

それは――あまりにもレティにとって、甘美な果実だった。

「貴様らも、我が臣下となることを望むか？」

「ええ」

「は、はははははは、はい！」

レティは極めて冷静につとめて。リグルは震えながら必死に。

お互いに行動は違えど、間違いなく肯定する。運命――そんなものを操る能力を持つらしい吸血鬼の話は聞いたことがあったけれど、運命などというものが存在するならば、それがレティとギルガメッシュを引き合わせた。そんなことすら考えてしまう。

ギルガメッシュは、どこか満足そうに腕を組み。

「ならば、貴様らを我が臣下として認めよう。我が名はギルガメッシュ、^{オレ}我の臣下である以上、我が名に泥を塗ることは許さぬ」

「それじゃあ……ギルと、そう呼ばせてもらってもいいかしら？」

「ふん、好きに呼ぶがいい。臣下に敬称を強いるほどに^{オレ}我は狭量ではない。少々の無礼は許そう。ただし、過ぎた無礼はその首が飛ぶと知れ」

「ええ、分かったわ。私はレティ・ホワイトロック。チルノの保護者みたいなものよ。私のことも好きに呼んでくれて構わないわ」

「良からう。レティよ」

す、とレティは一礼する。そしてそれ以上は会話は必要ない、とばかりに、チルノの隣へ。

傲岸不遜な態度に、他者を見下すその姿勢。これにギルガメッシュの王たる雰囲気があれば、ただの偉そうな男に過ぎないだろう。だけれど、レティには分かった。ギルガメッシュは、『偉そう』なのではない。現実には、『王』なのである、と。

チルノの手前、遜るような姿勢を見せることができなかったため、ギルガメッシュに対して敬語を使うこともなく対応したが、実際には恥も外聞もなく忠節の姿勢を取りたいほどだった。

「それにリグル、だったか。貴様にも少々の無礼は許す。ただし、

能く仕えよ」

「は、ははは、はいっ、王様っ！」

「良い返事だが、少々多い。簡潔に済ませよ」

「は、はいっ！」

忠節を誓うルーミア。

純粹に慕うチルノ。

諦観に従うミスティア。

恐怖に震うリグル。

魅惑に惑うレティ。

今ここにギルガメッシュの、幻想郷の歴史を変える一軍は動き出した。

09 (後書き)

調子に乗って連続投稿。

「最強たる者たりえるとするならば、その力に慢心することなく精進せよ」

自分で書いてて思った。

お前が言うな

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2307ba/>

幻想郷征服録

2012年1月12日20時52分発行